

## 「『ともし火と秤』のたとえ」

2014年08月13日

マルコによる福音4章21節～25節。「また、イエスは言われた。『ともし火を持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためではないか。隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、公にならないものはない。聞く耳のある者は聞きなさい。』また、彼らに言われた。『何を聞いているかに注意しなさい。あなたがたは自分の量る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる。持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。』」

現在の私たちの生活で、真っ暗闇はなかなか体験できないのではないだろうか。どこかに電気の明かりがある。子どもの頃、しばしば停電があった。辺りは真っ暗闇になり、ろうそくを灯して食事をした。薄明りでもろうそくは、安心を与えてくれた。主イエスの時代、夜は真っ暗であった。灯油のともし火は、あたりを照らし、ホッとさせられたに違いない。マタイ福音書5章15節に「また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである」と、ともし火の効能を書いている。誰でも理解できる「ともし火」のたとえである。

ところが、上記のマルコ福音書は「隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、公にならないものはない。聞く耳のある者は聞きなさい」と続いている。小さなともし火が全てをあらわにし、公にするとはいえない。

今日は、情報過多の時代であるが、真実は隠され、権力によって秘められたことが多く、疑心暗鬼になり、不安が募っているのが事実である。全てがあらわに、公になることがあるだろうか。主イエスは、あると言われる。それは、歴史の終わり、終末の裁きの時にある。その時を「ともし火を持って来る」と言っているようだ。ともし火の明かりが来る、即ち終末時に、全てがあらわにされる。かつては「お天道様が見ている」という言葉があった。子どもたちに「お天道様が見ているから、悪いことをするな」と諭していた。この言葉は、今は死語になっているらしい。主イエスは、全てがあらわにされる世の終わりが来る、「耳のある者は聞きなさい」と言われる。理性からすれば、突拍子もない信仰であるが、終末待望信仰がキリスト教を、自らを律する生命的な宗教にしてきた。

もう一つは「あなたがたは自分の量る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる」という「秤」のたとえである。マタイ福音書7章1～2節に「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる」と書かれている。人は皆、自分の量る秤で人を量るが、その同じ秤で自分が人から量られ、そして、その量られ方は更に厳格になる。だから、自分の小さな価値観で人を裁くなと教えている。人を裁く時「私は、その人ほど愚かではない」という優越感を持ってするが、その優越感は根拠も、実態もないことを知るべきである。

ところが、上記のマルコ福音書の後半は「持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる」と続いている。「与えられ」という言葉につながりはあるが、内容はつながっているとは思えない。この言葉は「マタイ効果」と言われ、持つ者はますます持ち、持たない者はますます取り上げられていく現在の経済的状況を言い当てている。聖書の意図とは全く違うが、この言葉については、後で書きたい。